鳥見の記　散策の発見

第 10 回 春うららら

2019.4

表紙の写真（上段）は、寒波が数日停滞していた寒い日に、筑波山のカタクリの里で見つけたキクイタダキ（左）とミヤマホオジロ（右）です（他にシジュカラ・コゲラ・ウソ・カシラダカを目撃しました）。そして、桜の蕾が今にもはじけそうな暖かい日、オシドリを見に千葉県佐倉市の DIC 川村記念美術館に行きました。*「俺が一番の男前だ !?」*と言わんばかりに相手を求めて池で競い泳ぎ回る多数のオシドリのオスの群に目を奪われました。

野鳥好きのブラリーマンでも、みずき野近辺以外の「鳥見」はあまりしなかったのですが、「まだ見ぬ鳥探し」をする「バーダー」になった昨今です。

4月で冬の鳥見のシーズンも終わりますが、初見を体験してたくさんの冬鳥を見付けられたでしょうか。今年はめったに見られないベニマシコやヤマガラにさくらの杜公園で、第2調整池では、コガモのつがいに出会いました。ただ、エナガ・シジュウカラ・コゲラ・メジロの「混群」が一度も見られなかった残念なシーズンでもありました。

もうすぐ改元。新年号を祝福するように、我が街と里山のフィールドでは、肌を刺す冷たい風がいつしか暖かい春のそよ風に変わり、野草が大地や畔道から顔を出し、雑木林では一斉に若葉が芽吹き若草色の春の景色になりました。

きれいなオシドリを求めて

表紙の写真に、みずき野近辺では見られないオシドリを取り上げました。オシドリは、「ヲシ(愛)する鳥」がその名になったと言われています。漢字では「鴛鴦(おしどり)」と書きますが、「鴛(えん)」がオス、「鴦(おう)」がメスを指し、その語源は中国の故事「鴛鴦(えんおう)の契(ちぎ)り」に由来するそうです。「おしどり」は、常時寄り添い仲睦まじい夫婦の代名詞として使われますが、実際は、毎年メスが抱卵を始める頃に、つがいの「契(ちぎ)り」を解消し次の繁殖期には互いに別の相手とつがいになる習性をもつカモ科の冬鳥(留鳥)です。森や深い林のある湖沼・池を好み、樹上や木の洞(ほら)を寝床にして、カシやナラのドングリや水辺の水生昆虫を餌とします。繁殖期のオスは、日本一カラフルできれいな鳥と称され、後方に伸びる冠羽(かんう)と、きれいなオレンジ色のイチョウ葉型の三列風切(さんつかざきり)①の「銀杏羽(いちょうば)」を持っています。メスは、全身が灰褐色で嘴(くちばし)が黒く、目には後方にのびる白い線があります。

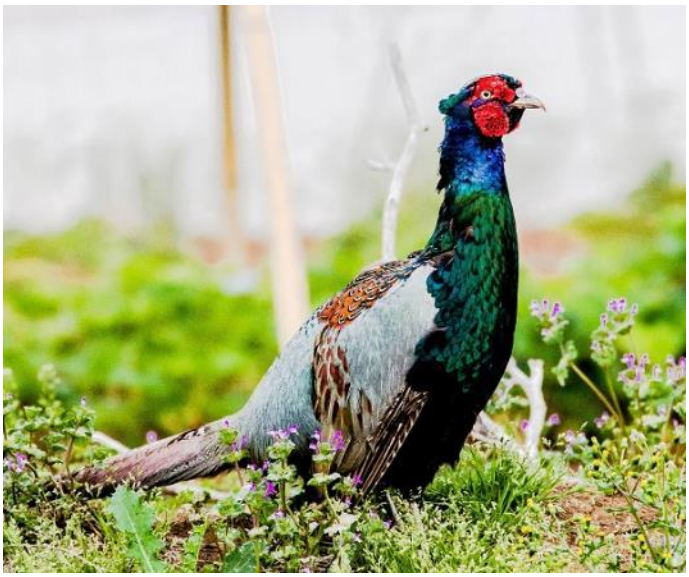
鳥識① 三列風切羽：
鳥の翼の呼び方のひとつで、翼の風切羽を、先端方向から初列・次列・三列に細分して呼ぶ。
初列風切羽はハバタキして前進するプロペラの役目。次列風切羽は浮力を生み出す役目。三列風切羽はその浮力を増大させる役目を担っている。

左の写真は、2017 年 5 月 28 日 10 時頃、第2調整池から畔道を用水路に沿った田んぼに飛来し、飛び立ったオシドリ(オス)をとらえた1枚。飛翔時は特徴的な「銀杏羽」を収めています。
図鑑で調べるまで「なに鳥」なのか分かりませんでした。まさかオシドリが守谷やみずき野で見られるとは思いもよらず、分った途端にもっときれいに写真に収めたくなりました。

オシドリの繁殖期は4月～7月ですが、巣作りと抱卵・子育ては主にメスが行います。1回に7～12 個の卵を生み、約1カ月で孵化し、雛は直ぐ親鳥に促され水に入って 40～50 日で親離れします。オシドリを一番よく身近に肉眼で観察できるスポットは、近郊では前述の DIC 川村記念美術館の池でしょう。

オス(左)とメス(右)　いずれも佐倉市の DIC 川村記念美術館

キジやツバメの繁殖の生態観察



4月中旬～5月初め頃
戸頭ロータリー先の通りを取手方面へ 60m位行った
左側の畑の小高い土塊にいたキジ

みずき野ではこの時期、キジやツバメの繁殖の生態を観察することができます。キジのオスは、繁殖期に赤い肉腫が肥大化します。大声で「ケ～ン」と鳴いて縄張り争いの「張り宣言」をし、その後両翼を広げて胴体に打ちつけてブルブルと羽音をたてる「母衣(ほろ)打ち」と呼ばれる動作をします。メスはオシドリと違い、複数のオスの縄張りに出入りするので乱婚か？などと言われます。次ページの４枚の写真は、母衣(ほろ)打ち動作をしているキジです（第３回「鳥見の記」pp.9-10 も参照ください）。

次の4枚は、母衣打ちするキジのいた反対側の畑で縄張り争いするキジたちの写真。

5月　争うオスを見ているメス
（戸頭ロータリー前の通りを取手方面に行った畑）

7月　里山の樹上のジキの親子
（第 2 調整池）

「キジ」に関する雑学いろいろ

雑学① 飛鳥時代の元号「大化」の後、白いキジが捕獲され、この世の瑞兆（ずいちょう）であると「白雉（はくち）（＝白いキジの意）」と改元された。孝徳天皇時代で 650～654 年の4年間。

雑学② 福沢諭吉が肖像になっている 2 種類の一万円札の内、昭和 59 年に発行されたお札（D券）の裏面には2羽のキジが印刷されている。

雑学③ 「キジを撃つ」「頭かくして尻かくさず」「ケンもほろろ」「きしめん」．．．等などキジにまつわる表現はいろいろ。

雑学④ 防衛省情報部のエンブレムは、キジを意匠としている(その訳はこちら)。

キジの観察は、鳴き声を頼りに声のする時間と場所を確認して数回訪れるのがポイントです。戸頭ロータリー近くの畑以外では、第2調整池の里山・3丁目の谷地のヤブ・8丁目の田んぼの竹ヤブ・農業用水路付近の田んぼの畔などでキジが今年も見られるでしょう。

第二調整池の里山

3丁目の谷地のアシ原

8 丁目の竹ヤブ

ツバメの子育て

ツバメの子育ては4月～8月です。（第1回「鳥見の記」 pp.8-9 も参照ください。）

4月初旬頃　オスがメスに餌で求愛

巣作りの枯れ草集め

6月初旬　孵化したばかりの雛

巣立ったばかりの雛

6月中旬　巣立ち、餌を求めるヒナ

6月末　一人立ちした「若いツバメ」（第2調整池）

巣立ちを終えた雛と親鳥たちは、河川敷やため池のアシ原にこぞって集り、渡りの時期が来るまで集団で過ごし、そこを寝床とします。第2調整池やみずき野近辺の農業用水路まわりのアシ原で毎年6月頃以降にその生態を見ることができます。

7月　子育ての途中、暑い夏の日水浴び
（第1調整池）

夕暮れ時アシ原の寝床へ帰る

ツバメは、鳥の生態を巣作りから子育て、旅だちまでを身近に観察できる代表的な鳥です。今年もお隣の軒下に、巣作りするツバメがきっと渡ってくるでしょう。

春に躍動する鳥たち

キジやツバメの他にも春のシーズンのみずき野や近辺で、鳥たちが食事や子育てにと躍動するシーンや、春に渡ってくるシギやチドリを見ることができます。

カワセミは、以前ほど頻繁に見られなくなりましたが、5～7月は繁殖のため食欲旺盛になるのでよく見られます。一度飛び立った後でも、この時期は1時間位後に再び戻ってきたり、次の日に

も同じ時間帯に出現します。カワセミは今まで、第1調整池・第2調整池・さくらの杜公園の裏の水路（通称カワセミ通り）・四季の里・取手農業公園等でよく見られました。

4月中旬　取手農業公園の池　10 時頃　ホバリングして大きな餌をとるカワセミ

オナガはツミの巣の近くで繁殖します。オナガの卵やヒナを狙ってやってくるカラスをツミが追っ払ってくれるためと言われています。「ツミを見たいならオナガを見つけろ」と言われる所以です。

4月末　オナガ（左）とツミ（右）　（戸頭団地6街区付近）

キアジサシ　　ムナグロとキョウジョウシギ（右から2番目）

5月初旬　稲豊橋を渡った左側のたんぼの畔道

５月中旬　取手農業公園で巣作り中のスズメ

６月中旬　子育てするスズメ

４月末　ドジョウを食するアマサギ

５月初め　旬縄張り宣言中のオオヨシキリ
（市之代）

４月末　繁殖期で目の周囲が青くなった
ダイサギがザリガニ食す（市之代）

５月初旬　小石まじりの原っぱで巣作りの
場所を探すコチドリ（市之代）

４月～　縄張り宣言するヒバリ
（第二調整池の野原）

６月　餌を運ぶサシバ
（市之代付近上空）

４月末　子づくりに夢中のコブハクチョウ（手賀沼）

６月末頃　子育てするコブハクチョウ
（手賀沼）

カルガモの親子（貝塚農業用水路）

6月末　アオサギの親子（市之代）

春うららの散歩道には、すっと通り過ぎてしまうと、気づかず見過ごしてしまう野草の花や宙を舞う蝶などみずき野ならではの風情が沢山あります。野鳥たちのちょっとした仕草を楽しんでいただく散策の参考になればと思います。

次回は、朝方から少し汗ばむ初夏にお会いしましょう・・・・

３丁目のバーダー・サトー　佐藤 健三